

病害虫発生・防除情報メールサービス

大阪府環境農林水産部農政室

特に注意！(5月)①

なす：うどんこ病



葉表の病斑



葉裏の病斑

特徴

- ◆ 窒素過多で気温が25～28℃、湿度が50～80%で日照不足が続くと発生する。

防除のポイント

- ◆ 発生が見込まれる時期にベルコート水和剤、フルピカフロアブル等を、発生を認めたらパンチョTF顆粒水和剤、スコア顆粒水和剤、プロパティフロアブル等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

たまねぎ：ネギアザミウマ(えそ条斑病)



ネギアザミウマの成虫



えそ条斑病の症状※

特徴

- ◆ 成幼虫が葉の汁を吸い、吸われた痕はカスリ状に色が抜けて白くなる他、えそ条斑病の病原ウイルス(IYSV)を媒介する。
- ◆ 高温少雨時に多発する。

防除のポイント

- ◆ えそ条斑病に対する有効な薬剤はないので、媒介昆虫であるネギアザミウマの防除の徹底をおこなうとともに、感染株を見つけたらほ場外に持ち出し適切に処分する。
- ◆ えそ条斑病の病原ウイルス(IYSV)は一部の雑草にも感染するので、ほ場内や周囲の除草を徹底する。
- ◆ ネギアザミウマの発生を認めたら、グレーシア乳剤、プレオフロアブル、スミチオン乳剤(アザミウマ類)等を散布する。なお、薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

次回の情報は5月下旬にお知らせします。

◎「防除指針」 <https://www.jppn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>

農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。

病害虫発生・防除情報メールサービス

大阪府環境農林水産部農政室

特に注意！（5月）②

ねぎ：べと病



べと病の症状

特徴

- ◆ べと病は好適条件(気温15℃前後で多雨)が揃うと急速にまん延する恐れがあることから、予防散布が重要である。

防除のポイント

- ◆ 発生が見込まれる時期にダコニール1000、ジマンダイセン水和剤等を散布する。
- ◆ 発生を認めたら発病株は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分するとともに、ベトファイター顆粒水和剤、リドミルゴールドMZ等を散布する。

※各薬剤に含まれる成分の使用回数の制限に注意する。

令和6年4月25日発出の病害虫発生防除情報「たまねぎ、ねぎのべと病に注意！」についてもご参照ください。

[https://www.jppn.ne.jp/osaka/R6th/boujyojyouhou/2404_R6bojo01\(tamanegi negi beto\) soshin.pdf](https://www.jppn.ne.jp/osaka/R6th/boujyojyouhou/2404_R6bojo01(tamanegi negi beto) soshin.pdf)

野菜・花き類：アブラムシ類



ワタアブラムシ※

特徴

- ◆ 作物を吸汁し、生育を阻害する。また排泄物にカビが発生し、すす病の原因となる。さらに、各種のウイルスを媒介し、作物によっては致命的な被害をもたらす。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、モスピラン顆粒水溶剤(なす、トマト、ミニトマト、未成熟とうもろこし、しゅんぎくなど)、アドマイヤー顆粒水和剤(なす、トマト、ミニトマトなど)、コルト顆粒水和剤(なす、トマト、ミニトマト、花き類など)、ウララDF(なす、トマト、ミニトマト、ピーマンなど)を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

次回の情報は5月下旬にお知らせします。

◎「防除指針」 <https://www.jppn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>

農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。

病害虫の発生予報(5月)

水稲

程度 品目	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
水稲	発生に注意:ジャンボタニシ(スクミリンゴガイ)				

果樹類

程度 品目	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
ぶどう			灰色かび病 チャノキイロアザミ ウマ		
	発生に注意:クワゴマダラヒトリ				
もも			せん孔細菌病		
	シンクイムシ類				
バラ科果樹	発生に注意:クビアカツヤカミキリ				
みかん			ミカンハダニ		
	ミカンハモグリガ				
いちじく	発生に注意:アザミウマ類				

野菜類

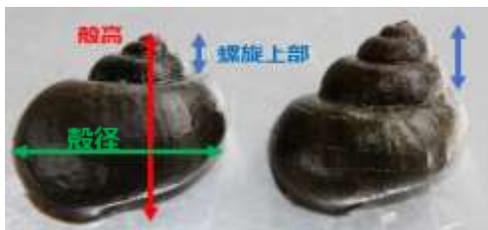
程度 品目	少ない	やや少ない	平年並	やや多い	多い
なす			すすかび病		
			灰色かび病		
			うどんこ病		
			アザミウマ類		
たまねぎ			べと病		
	ネギアザミウマ(えそ条斑病)				
ねぎ	発生に注意: さび病、べと病、ネギハモグリバエ、ネギアザミウマ(えそ条斑病)				
野菜・花き類			アブラムシ類		

水稲

ジャンボタニシ(スクミリンゴガイ)



ジャンボタニシ
(スクミリンゴガイ)



ジャンボタニシ

マルタニシ



ヒメタニシ

注)当該項目「ジャンボタニシ(スクミリンゴガイ)」の写真は、農林水産省リーフレット「ジャンボタニシによる水稲の被害を防ぐために」より引用。

特徴

- ◆ 成貝の殻高は2～7cm程度。
- ◆ 他のタニシ類に比較して、螺旋上部の長さが短く、殻径と殻高がほぼ同じである(上部写真参考)。
- ◆ 主に田植え直後(約20日後まで)の苗が被害され、欠株になる。

防除のポイント

- ◆ ピンク色の卵塊を発見した場合は、水中に掻き落とす。
 - ◆ 水深4cm以下では自由に移動できないので、田植え後の浅水管理が有効。
 - ◆ ほ場が凸凹の場合、深いところの稲が被害されるため、代かきをきちんと行い、ほ場を平らにする。
 - ◆ 用水路からの侵入を防ぐため、取水口や排水口に金網(編目5mm以下)を設置する。
 - ◆ 田植え直後にスクミノン、スクミンベイト3、ジャンボたにしくんなどを散布する。
- 注)スクミノン、ジャンボたにしくんを使用後は7日間湛水状態にし、かけ流しや落水はしない。



卵塊

農林水産省・安全局植物防疫課令和5年「スクミリンゴガイ防除対策マニュアル(移植栽培)」はこちら
https://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/gaicyu/siryou2/sukumi/PDF/sukumi_manual.pdf

カラー技術資料「ジャンボタニシ(スクミリンゴガイ)から稲を守りましょう!」についてもご参照ください。
<https://www.jppn.ne.jp/osaka/color/tanishi/tanishi2017.pdf>

ぶどう

灰色かび病



花がらでの症状

特徴

- ◆ 多湿条件で発生が多くなる。
- ◆ 胞子が雨や風によって飛散し、傷口等から感染する。

防除のポイント

- ◆ 適切に換気を行い、湿度を下げるようにする。
- ◆ 第1回ジベレリン処理から結実始めの間にビニルでマルチングをする。
- ◆ 花がらが発生源となることが多いので、開花後に花がらを取り除く。
- ◆ 開花直前または落花直後にゲッター水和剤、スイッチ顆粒水和剤、オンリーワンフロアブルなどを散布する。

チャノキイロアザミウマ



被害果*

特徴

- ◆ 巨峰、シャインマスカット等の大粒系品種で被害が大きくなりやすい。

防除のポイント

- ◆ ディアナWDG、エクシレルSE、モスピラン顆粒水溶剤などを散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

クワゴマダラヒトリ



クワゴマダラヒトリの幼虫※

特徴

- ◆ 成虫は年1回、8～9月にアカメガシワ、ニセアカシア、カラスザンショウなどに産卵する。
- ◆ 主に中齢幼虫で落葉や樹木の地際部で越冬する。越冬後、3月以降に幼虫が移動しブドウの新梢や葉を食害する。

防除のポイント

- ◆ ほ場内及び周辺の除草を徹底する。
- ◆ 初期に新梢の生長点に加害されると、被害が大きいのので初期防除に努める。
- ◆ 発生を確認した場合は、オリオン水和剤40、フェニックスフロアブル、エクシレルSEなどを散布する。

※注意！

一部の農薬は、果粉溶脱を生じるおそれがあるので、幼果期から果粒肥大期の散布を避けて袋かけ以降に使用し、無袋栽培(傘掛けを含む)には使用しない、等の注意事項が掲載されていますので、よく確認してください。

もも

せん孔細菌病



春型枝病斑



葉の病斑

特徴

- ◆ 春になると越冬した病原菌が増殖し春型枝病斑(前年枝の表面が黒褐色で、陥没したり、裂けたり、かさぶた状になる)を生じる。
- ◆ 病原細菌は、雨水に混じって分散し、気孔や傷口から感染する。

防除のポイント

- ◆ 開花後、枝に形成された病斑を見つけた場合は、早急に健全部を含めて大きめに取り除き、園外で適切に処分する。
- ◆ 発生を認めたら、バリダシン液剤5、スターナ水和剤等を散布する。
- ◆ 風当たりの強いほ場では防風ネットを設置する。

シンクイムシ類



被害果

特徴

- ◆ ももの果実に食入するシンクイムシ類は、ナシヒメシンクイ、モモシンクイガ、モモノゴマダラノメイガがある。

防除のポイント

- ◆ 被害枝は除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 産卵期から幼虫加害期(5月上旬～7月下旬)にノーモルト乳剤、アディオン乳剤、サムコルフロアブル10、ディアナWDGなどを散布する。

バラ科果樹(もも、すもも、うめ等のサクラ属)

クビアカツヤカミキリ



フラス



幼虫

株元に溜まったフラス

特徴

- ◆ 成虫は体長2～4cm。前胸部は明赤色で、全体は光沢ある黒色。成虫は6～8月頃に出現。
- ◆ 幼虫は樹木内部を食い荒らし、枯死させる。3月下旬から中華麺～うどん状のフラス(木くず等の混合物)を出す。
- ◆ フラスが出ている穴の周辺に幼虫がいる可能性が高い。
- ◆ 若齢幼虫はうどんよりも細い(中華麺状)フラスを出すことがあり、この時期の防除が効果的。

防除のポイント

- ◆ フラスを見つけたら、千枚通しや針金等を穴に入れ、中のフラスをかき出してからロビンフッド、バニカカミキリムシエアゾールを注入するか、幼虫を突き刺して殺虫する。
- ◆ ネット内での交尾・産卵を防ぐため、定期的にネット内を確認し、成虫を見つけしだいハンマーなどで捕殺する。



成虫

「クビアカツヤカミキリの生態と防除対策(R6.3改訂版)」
についてもご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/attach/318/00000000/kubiaka_osaka.pdf

みかん

ミカンハダニ



被害葉

特徴

- ◆ 梅雨明け後に発生が多くなる。

防除のポイント

- ◆ 6月中～下旬に、ハーベストオイル、トモノールSなどのマシン油剤を散布する。
- ◆ 発生を認めたら、ダニコングフロアブル、スターマイトプラスフロアブルなどを散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。
- ◆ 薬剤を散布する場合は、葉裏にも薬液がかかるように散布する。

ミカンハモグリガ



被害葉(葉裏)

特徴

- ◆ 夏・秋期に発生が多く、幼木に被害が多い。
- ◆ 発生が多いと、かいよう病を誘発する。

防除のポイント

- ◆ 新梢、新葉を中心に散布すると効果的である。
- ◆ 発生を認めたら、アディオン乳剤、ノーモルト乳剤、ロディー乳剤などを散布する。
- ◆ アディオン乳剤は、散布後にハダニ類が発生しやすいので注意する。

いちじく

アザミウマ類



被害果

特徴

- ◆ 果実の横径が2.5～3.0cmの頃から2週間程度の間に侵入する。
- ◆ 果実内に侵入し食害する。食害された果実は内部が変色する。

防除のポイント

- ◆ 成虫発生期(5月下～6月中旬)にスピノエース顆粒水和剤、ディアナWDGなどを散布する。
- ◆ ほ場の周囲を0.8mm目合いの赤色ネットで覆い、成虫の侵入を抑える。
- ◆ 乱反射型光拡散シートをマルチとして設置し、成虫の侵入を抑える。

野菜

なす

すすかび病



葉の病斑

特徴

- ◆ 高温多湿になる施設栽培で発生が多い。

防除のポイント

- ◆ 適度に換気を行い、湿度を下げる。
- ◆ 発生が見込まれる時期にダコニール1000、ベルコート水和剤等を、発生を認めたらスコア顆粒水和剤、パレード20フロアブル等を散布する。

灰色かび病



被害果

特徴

- ◆ 咲き終わった花弁や幼果に感染しやすく、20℃程度の多湿な環境条件や過繁茂で発病が多くなる。

防除のポイント

- ◆ 適度に換気を行い、湿度を下げる。
- ◆ 発生が見込まれる時期に、ベルコート水和剤等を、発生を認めたら、セイビアーフロアブル20、ゲッター水和剤、ファンタジスタ顆粒水和剤などを散布する。
- ◆ 開花後の花弁を取り除く。
- ◆ 同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

アザミウマ類



ミナミキイロアザミウマ成虫※

特徴

- ◆ ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマが果実や葉を加害する。なお、ミカンキイロアザミウマの果実被害は、「水なす」で目立つ。

防除のポイント

- ◆ 苗からの持ち込みによる発生に注意する。
- ◆ 育苗期後半～定植当日にモベントフロアブル、アベイル粒剤等を施用する。
- ◆ 発生が見られたら、アフーム乳剤、ファインセーブフロアブル、ベストガード水溶剤(ミナミキイロアザミウマ)などを散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ◆ 雑草はアザミウマ類の生息場所となるため、ほ場内および周辺の除草を徹底する。

野菜

たまねぎ

べと病



葉の病斑

特徴

- ◆ 葉に黄白色のぼやけた病斑が生じ、灰白色の薄いかびができる。
- ◆ 4～5月ごろ平均気温が15℃～20℃ぐらいで、雨が続くときに発生が多い。

防除のポイント

- ◆ 土壌中に被害葉が残ると伝染源になるので、被害株を集めて、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 発生が見込まれる時期に、ダコニール1000、ジマンダイセン水和剤などを、発生を認めたらベトファイター顆粒水和剤、リドミルゴールドMZなどを散布する。

ねぎ

さび病



葉の病斑

特徴

- ◆ 葉面にオレンジ色のやや隆起した小斑点が多数できる。
- ◆ 多発すると被害葉が枯死する。
- ◆ 気温が22℃ぐらいで雨の多いときに発生が多い。
- ◆ 肥料切れした畑で発生が多い。

防除のポイント

- ◆ 菌は被害植物上で越冬するので、被害株を集めて、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 発病前に、アミスター20フロアブル、ジマンダイセン水和剤などを予防的に散布する。

野菜

ねぎ

ネギハモグリバエ



葉の食害痕

特徴

- ◆ 葉の内部を幼虫が食い進み、その痕が細長く白い筋になる。
- ◆ 新系統が発見されており、従来に比べて一葉あたりの幼虫数が多く、集中的に葉肉を食害するため、葉が白化したようになる。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、系統に関わらず、「ハモグリバエ類」、「ネギハモグリバエ」に適用のあるグレーシア乳剤、アフーム乳剤などにより、発生初期の防除を徹底する。



▲新系統について詳しくはこちら

ネギアザミウマ(えそ条斑病)



えそ条斑病の葉の病斑

特徴

- ◆ ネギアザミウマは葉を吸汁し、加害部は白く色が抜ける。
- ◆ えそ条斑病は、ネギアザミウマが媒介するウイルス病である。はじめ、葉身に紡錘型のえそ条斑を呈し、進行すると病斑が癒合拡大し、葉が萎凋・枯死することがある。

防除のポイント

- ◆ えそ条斑病に対する有効な薬剤はないので、媒介昆虫であるネギアザミウマの防除を徹底するとともに、感染株を見つけたらほ場外に持ち出し適切に処分する。
- ◆ えそ条斑病の病原ウイルス(IYSV)は一部の雑草にも感染するので、ほ場内や周囲の除草を徹底する。
- ◆ ネギアザミウマの発生を認めたら、グレーシア乳剤、プレオフロアブル、スミチオン乳剤等を散布する。なお、薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。



ネギアザミウマ